

平成 2 1 年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 学習習慣の育成と教科指導力の強化 ①自主的計画的な学習態度の育成に努め、平日の家庭学習3時間以上の割合 90%以上を目指す。	① ・ホーム担任・教科担任による個人面談等を充実させ、自主的・計画的な学習の取り組みを指導する。	計画を立てて学習に取り組んでいる。 A ほぼ日常的に計画を立てて学習している B 週に半分程度は計画を立てて学習している C 計画的に学習しているのは週に1回前後である D 計画的に学習するのはまれである	A 28.0% B 40.5% C 18.1% D 13.3%	A+B=68.5%。昨年同期より3.7%上昇。やや改善が見られる。昨年来、6割を超えるようになった。C・D評価の生徒の個別分析を迅速に行い、生活改善をアドバイスする。 A評価の増加を目標に、次年度もホーム担任・教科担任による個人面談を継続し、また、保護者の理解・協力を得ながら粘り強く取り組む。
	② ・「生活実態調査」を利用して生活を見直しさせる。 ・ホーム担任・教科担任が連携して課題等の回収の徹底を図る。	平日の家庭学習時間を平均すると、 A 4時間以上である B 3時間以上～4時間未満である C 1時間30分以上～3時間未満である D 1時間30分未満である	A 24.4% B 30.6% C 39.7% D 5.2%	A+B=55.0%。昨年同期より7.9%下降。昨年は、一昨年比で12.8%の上昇が見られたが、今年度は下降した。 本校の授業を十分理解するには、家庭学習時間3時間は必要である点は変わらないので、C・D評価の生徒には、予習を徹底をさせるとともに、ホーム担任・教科担任による課題等の回収や「生活実態調査」を利用した生活改善指導を強化する。
学習習慣の育成と教科指導力の強化 ②教師相互の計画的・恒常的な授業研究・授業評価・授業公開・互見授業を実施し教科指導力を強化する。	① ・「生徒による授業評価」を利用し、教師個人だけでなく、教科全体で改善に取り組む。 ・研究授業・授業公開・互見授業・教科指導研究会を実施する ・各種研修に積極的に参加する。	先生の授業は分かり易く充実している。 A どの先生の授業も分かり易く充実している B 分かり易く充実した授業をする先生が多い C 分かり易く充実した授業をする先生は半数程度である D 分かり易く充実した授業をする先生は少ない	A 17.2% B 62.6% C 17.4% D 2.7%	A+B=79.8%。昨年同期より2.2%下降。A評価のみでは1.2%上昇。 授業の工夫・改善は教員の本分である。教員各々は、「生徒による授業評価」等も参考にして改善に取り組むとともに、教科内でも、協議を重ね、改善に取り組む。 A評価の割合を増やすことを目標に次年度も取り組む。
学習習慣の育成と教科指導力の強化 ③生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を研究工夫することで全ての生徒に対応した有効な指導法を確立する。	① ・生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を工夫するための学年会議、教科会議を適宜開く。	各教科における課題は、他の教科とのバランスを A 配慮して出されている B おおむね配慮して出されている C あまり配慮して出されていない D ほとんど配慮して出されていない	A 24.0% B 43.4% C 25.6% D 7.1%	上段資料では、生徒評価A+B=67.4%。昨年同期より6.7%上昇。昨年に引き続き6割を超え、改善が見られる。 しかし、教師側の取組の努力(下段資料:教師評価A+B=94.6%。昨年同期より6.4%下降。)ほど生徒には伝わっていない。今後も学年間、教科間でより密に連携をとる必要があるため、継続して取り組む。
		生徒に与える課題の量・質を工夫するための学年会議、教科会議が A 適切に開かれている B ある程度適切に開かれている C あまり開かれていない D 全く開かれていない	A 70.2% B 23.4% C 6.4% D 0.0%	
	② ・生徒個々人の習熟度を把握するため、学年内、教科内の連携を密にする。 ・教員各自及び教科が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らす。	習熟度授業は学力向上に向け効果的である。 A 習熟度授業に満足しており、学力向上に十分つながっている B 習熟度授業にある程度満足しており、学力向上におおむねつながっている C 習熟度授業にはあまり満足しておらず、それほど学力向上に十分つながっているとは思えない D 習熟度授業は必ずしも学力向上につながっていない	A 34.7% B 48.6% C 10.6% D 3.8%	A+B=83.3%。昨年同期より1.8%上昇。 今年度も、個に応じた指導を特に大切な重点目標に掲げて取り組んだ。その具体的取組の一つが習熟度授業の充実であり、A・Bの合計が83.3%であることは評価できる。次年度も、教員各自が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らすことによって生徒の学力向上につなげるため、取り組みを継続する。
学校関係者評価委員会の評価	①生徒に与える課題のための会議が「C あまり開かれていない」という教員の意見を具体的に検証しなければならない。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	①会議において、具体的に意見を出してもらい全員で検証する。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)
2 自主性の高揚と規範意識の向上 ①自主性・自律性を備えた生徒を育成するため、学年会、各分掌は組織的に取り組む。	①・登校指導、街頭指導、全校集会時の講話等を通して基本的な生活習慣の確立指導や、マナー指導を強化する。	本校の生活指導(服装・遅刻・無断欠席等に関する指導)は A 適切な指導を行っている。 B 概ね適切な指導を行っている。 C もう少し徹底して指導する必要がある D 適切な指導とはいえない	A 38.8% B 46.8% C 3.6% D 0.6%	A+B=85.6%。昨年同期85.5%。横ばい。 A評価は4.6%上昇。 A評価のさらなる上昇を目標に、取組を継続する。
	②・体育祭を土曜日に実施するなどして、生徒会の活動状況を保護者に広報する取組を強化する。	生徒会活動やHR活動を充実させるための指導方法について A 十分検討され工夫・改善がなされている B ある程度検討され工夫・改善がなされている C それほど工夫・改善されていない D ほとんど工夫・改善されていない	A 37.3% B 58.5% C 4.3% D 0.0%	A+B=95.8%。昨年同期97.0%。A評価が10.7%上昇。 今年度は、体育祭を土曜日に実施するなどして、生徒会などの活動状況を保護者や地域に知っていただく取り組みを実施した。継続して取り組む。
	③・総体等の結果を文書で配布するなどして、部活動の状況・結果を保護者や生徒に知らせる取組を強化する。	部活動を通して、進んで物事に取り組む姿勢が A 身についてきた B 十分とはいえないが、身につけてきている C あまり身につけていない D 全く身につけていない(部に加入していない)	A 29.9% B 42.4% C 9.9% D 17.5%	A+B=72.3%。昨年同期70.1%、昨年同期より2.2%上昇。 今年度は、部活動の戦績便りを配布するなどして、部活動の状況・結果を保護者に正確に知っていただく取り組みを実施した。 D評価の生徒には、本校の部活動は中学のそれと違い、生徒自身の自主性が大切であることを自覚させ、取り組ませる。継続して取り組む。
規範意識の向上と自主性の高揚 ②生徒と深く関わり人間としての「在り方生き方」を考えさせることで規範意識や帰属意識・共生意識を育成する。	①・学校行事等に対し、準備や後片付け等に奉仕・ボランティアの意識を持たせ取り組ませる。 ・インターンシップを利用して、奉仕・ボランティアの気持ちを育てる。	文化・芸術に触れたり、奉仕活動・ボランティア活動に参加する機会は A 十分設けられている B ある程度設けられている C 少ない D 全くない	A 36.2% B 47.9% C 16.0% D 0.0%	A+B=84.1%。昨年同期より13.7%上昇。 「マクベス」鑑賞のように、質の高い芸術に触れさせることを考えたい。 除雪や外掃除など、自主的な奉仕活動の場面を有効に活かしてボランティア精神を育成しなければならない。継続して取り組む。
	②・生徒理解に係わる講習会・研修会に積極的に参加する。 ・校内研修会の実施により、教員の資質向上に取り組む。	悩みや意見がある時は A 必ず先生に相談している B 時々先生に相談することがある C 先生に相談することはまれである D 先生に相談することはない	A 30.8% B 50.3% C 13.4% D 5.4%	A+B=81.1%。昨年同期より3.8%上昇。 C・D評価の生徒は、友人等に相談することを考えていると思われるが、先生も頼れる存在であることを実感させられるよう工夫する。 欠席の目立つ生徒・内面に悩みを抱えている生徒も多いので、継続して取り組む必要がある。
学校関係者評価委員会の評価	①「文化・芸術に触れたり、奉仕活動・ボランティア活動に参加する機会」は適切かという検証の仕方は、無理がある。文化・芸術についてと奉仕活動・ボランティア活動についてを別にして検証すべきであろう。 ②悩みや意見がある時の相談について、C・D評価であるからといって、先生を信頼していないわけではない。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	①実際は、それぞれ別に検証しているが、まとめた形で表示した。次年度は、指摘のとおり別々に検証・表示する。 ②C・D評価の生徒の中には、誰にも相談できず悩んでいる生徒がいるはずであるという前提で、これからもカウンセリングマインドをもって指導に当たる。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)
3 キャリア教育の推進と自己実現能力の育成 ①学校教育全体にキャリア教育を展開し、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意志決定能力を育成する。	① 全教員が日々の授業において意識的にキャリア教育を実践する。	キャリア教育の観点を意識して日々の授業を A 恒常的に行っている B 時々行っている C 行うことはまれである D 全く行っていない	A 25.5% B 53.2% C 10.6% D 4.3%	A+B=78.7%。昨年同期より7.0%下降。 インターンシップの実施と合わせ、再度キャリア教育の大切さを認識し取り組まなければならない。
キャリア教育の推進と自己実現能力の育成 ②進路学習や講演会、個人面談等により進路意識を啓発して、進路実現を目指す態度を早期に育成する。	① 個人添削等の指導を継続、強化して受験に必要な学力をつけさせることで、生徒が希望する第一志望校に出願させる。	出願した第一志望校に A 満足している B だいたい満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	A 44.8% B 38.9% C 12.3% D 3.9%	2月8日、3年生全員にアンケートを実施 3年生が、これまでの自身の勉強と学校の進路指導を振り返り、出願時点で本校の指導と自分自身の取組にほぼ満足している生徒がA+B=83.7%。昨年同期より2.9%上昇。 昨年度以上にセンター試験が難化したにもかかわらず、数値の上昇があったのは評価できる。しかし、数値的には例年並みで、次年度も、指導の方法を検証し継続して取り組む。
キャリア教育の推進と自己実現能力の育成 ③教科研究会や二次試験問題解法研修会等の充実により、教職員のスキルをアップし、個別指導体制等の充実を図る。	① 二次試験問題解法研修会を各教科で実施し、教科指導力を高めるとともに、個別指導体制を整備して添削指導に当たる。	到達度の高い生徒に対して、難関大学合格のために必要な学力を A 十分つけることができた B ある程度つけることができた C それほどつけることができたとはいえない D ほとんどつけることはできなかった	A 17.0% B 66.0% C 6.4% D 0.0%	A+B=83.0%。昨年同期より1.4%上昇。 A評価の上昇を目指して、継続して取り組む。
学校関係者評価委員会の評価		①インターンシップの実施について、本校の先輩をもっと利用・活用してはどうか。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		②インターンシップの実施については、すでに本校の先輩の話聞く機会を設けている。体験のみならず、体験発表・報告会を充実させて実のあるものにしていく。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)
<p>4 特色ある教育活動とSSH事業による人材育成</p> <p>①学校設定科目や課題研究、海外研修等を通して、事象を科学的に探求する論理的な思考力と創造性・独創性や英語活用能力を育成し、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目指す。</p>	<p>① 本校理数科教育にふさわしい学校設定科目や課題研究、海外研修等の在り方を研究・工夫する。特に、シンガポールの高校生受け入れに関して工夫を凝らす。</p>	<p>二期SSH事業のねらいの一つである「国際化」に関わる教材開発や指導法改善が</p> <p>A 適切に行われている B ある程度適切に行われている C あまり行われていない D 全く行われていない</p>	<p>A 57.4% B 42.6% C 0.0% D 0.0%</p>	<p>A+B=100.0%。昨年同期より4.1%上昇。 英語スピーチコンテストや英語による課題発表、シンガポール研修等、充実してきている。継続して取り組む。</p>
<p>特色ある教育活動とSSH事業による人材育成</p> <p>②小中学生や地域にSSH事業を広報し、その成果を普及することによって本校理数科への理解を図る。</p>	<p>① 学校説明会、親子ドリームプロジェクト、体験入学、出前授業、SSH通信や小中学生体験教室等により、SSH活動および成果を近隣の中学校・保護者等へ広報する。</p>	<p>近隣の中学校への広報活動の成果が、理数科志願者の増加となつて</p> <p>A 十分に表れている B ある程度表れている C 少ししか表れていない D ほとんど表れていない</p>	<p>A 34.0% B 59.6% C 6.4% D 0.0%</p>	<p>A+B=93.6%。昨年同期より26.2%上昇。 昨年同様、6月下旬から7月上旬にかけて、能登全域の中学生とその保護者を対象に説明会を計7地区で実施した。また、今年度新たに理数科独自の体験入学も実施した。今後もあらゆる機会を利用して広報に努める。</p>
	<p>② 授業、教科研究会、学校行事および普通科向けのSSH事業を展開し、これまでの成果を全校的なものにする。</p>	<p>SSH事業の研究開発の成果が、全校に</p> <p>A 十分に還元されている B ある程度還元されている C 少ししか還元されていない D 還元されていない</p>	<p>A 40.4% B 55.3% C 4.3% D 0.0%</p>	<p>A+B=95.7%。昨年同期より5.9%上昇。 日食観測会を実施するなどして還元に努めた。 次年度も、シンガポールの高校生の来校やSSH発表会などの場を利用して、できるだけ多くの生徒にSSH事業の魅力を実感させる。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>		<p>①理数科は「国際化」以外にも取り組んでいるはず。SSHの取組に評価を、生徒の声で検証してはどうか。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>①SSH事業としては、生徒の声を聞きつつアクションを起こしている。その生徒の声は、SSH事業の報告書にまとめられているので、来年度、参考資料として提示したい。</p>		